

第1部

2. デカルトの世界へ踏み出す

ぼくは大学を卒業するとすぐに産業界に身を投じました。当時の池田勇人首相の掲げる「所得倍増計画」が始まって5年ほどが過ぎた頃でしたから、当り前の行動だったと言ってもよいでしょう。友人、知人たちの多くも同じような行動を取り、勇躍して全国に散って行きました。

ぼくの就職した会社は産業用の大形機械の製造業でした。配属されたのは設計部門でしたが、営業の現場、工場の現場、建設工事の現場、といった現場に身を置く機会も多い仕事でした。そんな訳で、多種多様な人たちと交流することになりました。

ところで、デカルトの生活環境はどんなものだったのでしょうか。学問の研究に明け暮れたようですから、周囲にいる人たちもそういう類の人たちが多かったと思われます。しかし、後ほど第2部に出てきますが、彼は30年戦争に従軍しているのです。そんな時には、司令官や将校、兵士など、多様な人々に接触したはずですが、彼はそういう人たちのことをあまり語っていないようです。

ぼくの就職した会社は大企業でしたから色々な部門があり、色々な人たちがいました。同僚の設計技術者、営業マン、工場のスタッフ技術者、工場現場の作業員、研究職の技術者、工事の現場監督、工事現場の作業員、経営管理スタッフ、等々多種多様な人たちと接触する機会が豊富にありました。

多くの人たちと交流することは、多くの学びを与えてくれることになりました。人は環境と立場によって自己認識の仕方や考え方が違ってくことを肌感覚で知ったのも、そういった交流の中でのことでした。

だからきっとデカルトも、学問の環境と離れて従軍した時には多種多様な人たちと交流し、そこから得たものも多かったのではないかと思います。何故かそういうことをあまり語っていないのです。

彼にとっては、従軍から学ぶことは大して無かったのかもしれません。彼にとっての従軍のメリットは、ドナウ河畔のノイブルクの冬営地に足留めされた時、終日一人で炉部屋に閉じこもって心ゆくまで思索にふける機会を得たことに尽きるのでしょうか。

そんな風に受け止めますと、デカルトの思想は、彼の学問研究と徹底した思索から

生まれてきたように思えます。西欧近代主義の基本思想は彼の偉大な頭脳の中にある時空から生まれてきたと言えるのかもしれませんが。

そんなことに想いを馳せているうちに、その偉大なる時空から生まれてきたものの価値がさらに大きく感じられ、今のぼくの立ち位置を見つめながら彼の足跡を追いかけることの魅力がますます高まってきたのでした。

デカルトが言うように、「正しく判断し、真と偽を区別する能力」は、全ての人に生まれつき平等に具わっているようです。彼はその能力を、良識とか理性、という呼び方をしています。

理性という言葉で表現される内容は結構明確ですが、良識という表現を使いますと内容が曖昧になります。彼の著書「方法序説」のある翻訳書の訳注には、「良識」を次のように説明しています。

*良識 bon sens もともと「正しい分別 sens」を意味する。「真偽を判断する能力」と定義され、「理性」と同義。後述の「自然（生まれながら）の光」にもつながる。なお、ラテン語 bona mens に由来する、「知恵」sagesse を意味することもある。

こうしてみますと、彼の中では良識は理性とほぼ同じものと捉えられていたと言えます。

そこで、考えてみたいことが一つ浮かんできます。全ての人に生まれつき平等に具わっている「正しく判断し、真と偽を区別する能力」とは、理性だけから生まれてくるのだろうか、ということです。

前に述べました通り、ぼくが産業界に身を投じてから出会ったのは多種多様な人たちでした。学問的、思索的傾向の強い人たちもいれば、感覚を頼りに行動することが生き方の殆どを占めている人たちもいました。議論や話し合いの際にも、冷静に論理的に話を進める人もいれば、その時に感じたことが全てであり正解であるかのごとき主張をする人もいました。

ぼく自身、研究室や設計室にこもっている時もあれば、工事や試運転の現場に出ていることもありました。また、商談の現場にいたこともありました。それぞれの場で意思決定や判断が必要になることはしばしばでした。そしてその意思決定や判断は、大きな流れの中でほぼ適切に行われていたと言ってもよいでしょう。

これはまさにデカルトが言うように、全ての人に生まれつき平等に具わっている「正しく判断し、真と偽を区別する能力」によるものなのでしょう。ぼくがほぼ適切な意思決定と

判断を行ってここまでやってこれたことを感謝しつつ、デカルトに報告したい気持です。

ここまで自分のことをたどってきますと、振り返ってみたいことが見えてきます。ぼくがほぼ適切な意思決定と判断をしてきたことの基盤にあるものは何だったか、ということです。

研究室や設計室で意思決定や判断をする場合、手元を集めた情報をもとに考察を行います。情報が足りないと思った時には、自分の想定する仮説に従って追加する情報を集めます。これを繰り返して、意思決定や判断を行うのです。

こうした意思決定や判断の在り方から考えてみますと、「正しく判断し、真と偽を区別する能力」とは「理性」だとすることが妥当なようです。まさにデカルトの語る文脈が示す通りなのです。

それでは現場ではどうでしょうか。工事や試運転の現場、および商談の現場です。ここで意思決定や判断をする場合、いま目の前で行われている作業の現状、機械の運転状況、そして商談での話し合いの状況をもとに、瞬時と言ってもよいような短時間にこれを行うことになります。

このような意思決定や判断に考察が入り込む余裕は、きわめて小さいものです。極言すれば、感じ取ったままに、直観に基づいて、という表現が相応しいのかもしれませんが。そこで湧いてくるのは、「正しく判断し、真と偽を区別する能力」とは「理性」だという主張に対する疑問なのです。

現場で判断する際に重要なことは、自分は何を感じ取っているか、自分の頭の中に何が浮かんでいるか、自分の働きかけが対象に何をもたらしているか、といったことを察知し、その総合としての判断ができるかどうかです。

感じ取ったり、頭の中に浮かべたり、働きかけの反応を感知したりすることができなければ、正しく判断し、真と偽を区別することは困難です。こうした見方をしますと「正しく判断し、真と偽を区別する能力」とは、「理性」に加えて、相互に感じ合うという特性を兼ね備えていると言えます。相互に感じ合う特性を「交感性」と呼ぶことにします。

デカルトは、「私たちの意見が分かれるのは、ある人が他人よりも理性があるということによるのではなく、私たちが思考を異なる道筋で導き、同一のことを考察してはいないことから生じるのだ」と言っています。

この一言に「交感性」という概念を加えてみますと、「....意見が分かれるのは、....理性や交感性があるということによるのではなく、私たちが同じものにも異なるものを感じ、異なる働きかけをすることから生じるのだ。それは当然のこととして、思考を異なる道筋で導き、同一のことを考察しないことにつながっていく」となります。

また、「良い精神を持っているだけでは充分でなく、大切なのはそれを良く用いることだということです。大きな魂ほど、最大の美德とともに最大の悪徳をも生み出す力を持っています。また、きわめてゆっくりと歩む人でも、常に真直ぐな道をたどるなら、走りながらも道をそれてしまう人よりも、はるかに前進することができます」というデカルトの言葉には、理性と交感性の重要性が潜んでいることが感じられます。

即ち、現代の科学技術の用語を使って表現するならば、理性は制御システムであり、交感性はセンサーと作動体、ということになります。大切なことは、制御システムとセンサーと作動体とからなる統合システムを、良く用いることだと言っているのです。

この方が、私たちの生きている現実をより適切に言い表わしていると思うのですが、どうでしょうか。

こうしたことを主張するばくは決してデカルトを否定するものではありません。むしろ、デカルトを尊敬し、その基本的考えを奉じ、彼の生きた時代から400年が過ぎた現代に、彼の思想をどう活かすことができるのかを一生懸命に探っている自分を感じます。

「.....わたしたちを人間たらしめ、動物から区別する唯一のものであるだけに、各人のうちに完全に具わっていると思いたいし、その点で哲学者たちに共通の意見に従いたい」と言ったデカルトの踏み跡に沿って、ばくは歩いているようです。

ずいぶん昔のことになりますが、ばくは「思索こそ最高の娯楽だ」と思ったことがありました。偉大な先人たちの本を読み、それを基盤に置いて色々と想いを巡らすのです。あつという間に時間が過ぎていきますが、とても大きな充足感をもたらしてくれました。

偉大な先人たちの本には、文学書もあれば社会科学や自然科学の著書もありました。会社に勤務の時代を含めてずーっと働いてきましたので、通勤や訪問の電車の中が読書や思索のための考房となっていました。揺れ動く車内で読書をするのは今でも得意です。

ばくは理系の出身ですから、経済学も政治学も、マルクス主義も中国古典も、現象学もユング心理学も、構造主義も認知科学も、日本文学も海外文学も、みんな車内考房で学んだこととなります。

こうした形で学んだことは、ぼくの中で混沌として存在しています。体系化できるようなものではありません。ぼくが身を置く環境によって、混沌の中から何かが浮かび上がってくるのです。

デカルトが浮かび上がってきたのは、脱西欧近代主義が求められる今の時代に、西欧近代主義の祖とも言える偉人が生きていたら何を考えただろうか、という想いと好奇心からでした。

西欧近代主義の祖と言われるのに相応しい人は他にもいます。ベーコン、ロック、ホッブスといった人たちです。もう少し時代を下れば、ルソー、スミス、カント、ヘーゲル、といった人たちがいます。

こうした人たちの著書を全部読むなどということはぼくには不可能なことですから、解説書や歴史書や事典の助けを借りながら、偉人たちの想いに迫ろうとし、いま迫りつつあるという訳です。

デカルトは自分の学問の方法に大いなる自信を持っていたことが、「方法序説」からも読み取れます。彼は、自分の方法によって知識を増やし、自分の精神と生の達しうる最高点に至る感触を感じており、それに満足感もおぼえていたようです。

人間の職業、純粹な人間としてなせる職業のうち、優れた重要なものが何か一つだけあるとしたら、それは自分の選んだ仕事だと信じたいほどだ、とさえ語っています。

しかし、彼は自分の方法が全ての人に適したものだと考えてはいなかったようです。自分が間違っていることもありうるし、真似てよい手本もあれば、従わないほうがよい例も数多くあるだろうと、彼自身が宣言しています。

デカルトは、自分がどういう道をたどってきたかを示して、自分の生涯を再現することが至上の喜びだと感じていたのです。

思想家の多くは自分の頭脳の産物や方法などを強く主張したがるものです。これは思想家に限ったことではなく、人間の一般的特性としてそうなのかもしれません。でも、デカルトの前の言葉からは、そういう兆候を感じることはできません。

彼は結構控えめな姿勢を貫いていたようなのです。見方によっては消極的、危機回避的とも受け止められる発言もあります。フランスを去ってオランダに移りそこで研究を続けた理由にも、そういったニュアンスが感じ取れます。

そういう姿勢を取ったデカルトの時空から偉大なものが生まれ、これが西欧近代主義の発展のバックボーンを担い続けて400年も経つのです。すごいことです。マスコミに乗ってチャラチャラしている、今をときめく知識人たちの時空からは大したものはいきません。

デカルトのこうした姿勢は、自由を選び取るために生まれたと言えるでしょう。彼の言によるとそれは、自分を基にして判断する自由、彼が期待するような学説はこの世に一つもないのだと考える自由、というものです。

こうした姿勢があったからこそ、あらゆる分野にわたって清濁合わせ飲むような読書と学習を重ねながら、その正しい価値を知り、邪に欺かれることなく、万象の中にある人間の在り方を的確に捉えることができたのでしょう。

ぼくが自由の空気に触れたのは高校時代でした。通っていた高校はまさに自由を体現していました。自由の裏には自主がありました。自由と自主は対のものであるとの感覚はこの時代に身体に染み付いたと思います。

例えば、こんなことが行われる風土だったのです。

- ・校則とか制約でもって生徒の行動をしばらない。
- ・授業も課外活動も生徒の自由意志に任せ、教師はほとんど干渉しない。
- ・出欠や遅刻などは記録するだけで、後の反省や処置は生徒の意志に任せる。
- ・授業時間は、大学の90分授業を上回る100分授業である。
- ・授業日程は2週間が1単位として組まれ、2週間目の土曜日は非登校日（即ち、休日、あるいは自主学習日）とする。

こうした風土の下で、ぼくが鮮明に記憶していることが3つあります。

- ・生徒会の集会で担当教師が論戦の槍玉に上がったが、教師は生徒たちを威圧するでもなく適当にかわすでもなく、平然と論戦に応じていた。
- ・ホームルームで担任教師と生徒との間に激論があった時、教師と生徒は対等の立場で議論し、教師が「ぼくもこのクラスを止めるから、きみも止めたまえ」という一言を吐くに至るまで徹底的にやっていた。
- ・スポーツの対外試合に必要なシューズを買いに、1時限目と2時限目の間の休み時間に学校を抜け出してデパートへ行き、2時限目に遅刻したことがあったが、学校も教師も何も言わなかった。学期末になって学科の担当教師が「このクラスは遅刻が少なく1人しかいなかったが、振り返ってみれば2時限目だったらゼロが当たり前だな」と皮肉を言っただけだった。

こんな風土の下で高校生活を送った訳ですから、それ以降のぼくの思考と行動は、自由

と自主に強く裏打ちされたものになったと言えそうです。それが良かったのか悪かったのかは何とも言えませんが、ぼくの生き方や踏み出す方向を左右する力として働いたことは確かです。

それから何十年も過ぎ、ぼくがデカルトに魅せられるようにして近づいたのは、西欧近代主義の限界が見えてきた状況下にあつて、その原点にあるものを探してみたいと感じたこと、そして、ぼくの中に培われたこうした土壌が導いたものだとして受け止めています。

「自分を基にして判断する自由、自分が期待するような学説はこの世に一つもないのだと考える自由」とは、何と凄い自由でしょう。圧倒されてしまいます。

デカルトは、過去の世紀になされたことに興味を持ちすぎると、現世紀におこなわれていることについて往々にしてひどく無知なままとなる、と言っています。彼はそういったことを感じるほどに、過去の書物や記録を読みあさったのでしょう。

ぼくは逆の状態にありました。現世紀におこなわれていることにどっぷりと浸かっていたのです。大学の工学部出身で、日本経済の高度成長の始まりの頃に産業界に身を投じた者として、それは当り前のことでした。

そういう訳ですから、ぼくが読みあさってきたのは、技術やマネジメントに関する書物がほとんどでした。それも新刊のものとか、先端をいくものが主流にありました。産業界に身を投じてから15年ほど過ぎたころから、文学書、思想や人間に関する書物を読むようになりましたが、それも近刊のものがほとんどでした。

ぼくは現世紀におこなわれていることに興味を持ち過ぎたために、過去の世紀に偉大なる人たちがおこなってきたことに無知なままだったのです。

こうした状態を突き破る契機になったのは、仕事上の問題解決や人々との交流の中で、ユングやマルクスの著書を読み始めたことだったと思います。西欧近代主義の主流からはみ出した不肖の子とも呼ばれるような人たちの著書に、なぜ興味を持ったのかは自分でもよく解りませんが、こうしたことが過去の偉人たちの世界へ導いてくれたのです。

このようにして、過去の世紀の偉大なる人たちがおこなってきたことへのぼくの無知の克服が始まったのです。デカルトの著作を読んでいる中で感じたことは、あの時代、即ち17世紀に生きた人たちと逆向きに、ぼくは歩んでいるということでした。

デカルトは、神学に敬意を表しており、天国への望み、天国へ導く啓示された真理が自分たちの理解力を超えていること、その真理の確かさについて語っています。その一方

で論拠の確実性と明証性そして基礎の堅固さのゆえに、数学を礼讃しています。

哲学については、同一のことがらについて真理は一つしかありえないのに、学者たちによって主張される違った意見がいくらでもあるということから、疑わしくないものは一つもないと受け止めました。そしてさらに、その原理を哲学から借りているかぎり、諸学問は堅固なものを打ち立てることができなかつたはずだと彼は判断し、これを学ぶ気を起こさなかつたのです。

このように、デカルトが持っていたものは神の啓示への信頼であり、求めていたものは数学の持つ堅固さの上に確立される学問であつたと言えるでしょう。神の啓示を、人間を幸せな世界へ導く道標のことであり、世界を支配している法則のことだと捉えるならば、彼が求めていたものとは、確固たる真理、合理の世界にある科学的真理だつたと言えます。

即ち、デカルトは精神世界の領域内で模索されていた“真理らしきもの”に背を向け、自然の合理世界の領域に真理を求めようとしたのです。それが、後々に詳しく取り組むことにしている、次のような言葉を生むことになったと捉えることができます。

われわれが人生にきわめて有用な知識に到達することが可能であり、学校で教えているあの思弁哲学の代りに、実践的な哲学を見いだすことができ、この実践的な哲学によって、火、水、空気、星、天空その他われわれをとりまくすべての物体の力や作用を、職人のさまざまな技能を知るようにはっきりと知って、同じようにしてそれらの物体をそれぞれ適切な用途にもちいることができ、こうしてわれわれをいわば自然の主人にして所有者たらしめる。

ぼくは、上に紹介しましたデカルトの言葉に近い世界、即ち、人間をして自然の主人にして所有者たらしめると思い込んでいる世界にいたのです。高度成長期の日本の産業界とはそんな世界だつたのです。その世界にどっぷりと浸かって、ぼくは20才台前半からの10数年間を過ごしました。

デカルトは教師たちへの従属から解放されるとすぐに、文字による学問（人文学）をまったく放棄して、“世界という大きな書物”から学ぼうとしましたが、ぼくは環境と状況の為すがままに大したことも考えずに、“産業界という特殊な世界”から学ぶことになったのです。

20才台前半からの10数年の間、ぼくは文字による学問から完全に離れた訳ではありませんが、学びの大部分は働く場および活動の場から得たものでした。自分の仕事や活動の中で何かを感じ取り、そこで考え、自分の考えたことや調べたことを周囲に伝えたり働きかけたりし、また周囲の反応を感じ取る、というサイクルの中で多くのことを学んだのでした。

“世界という大きな書物”から学ぶことを志したデカルトが狙っていたことと同類のものが、“産業界という特殊な世界”から学ぶことにもあったと、ぼくは感じています。但し、そこから得た成果のレベルには、かなりの差があることを認めざるをえません。人間としての器の違いはどうしようもないのです。

最近になって声高に語られる言葉の一つに“グローバル”があります。グローバルに事業展開をする、グローバルレベルで考える、グローバル人材を育成する、グローバルに編成したチームを運営する、といった風に使われています。その中で強く意識されているのが、文化の多様性の理解や、多様な思考と感覚を持つ人たちで編成するチームのマネジメントです。

こうしたことは、企業経営や経済活動の中から浮かび上がってきたものですが、400年ほど前にデカルトは、多様性を理解することの重要性に気付いていました。旅の中で他の人々の習俗を観察し考察して多くの食い違いの存在を認識することを通して、彼は最大の利点と言えるものを引き出したのです。

それは、自分たちにはきわめて突飛でこっけいに見えることでも、他の国々の大ぜいの人たちに共通に受け入れられ是認されている多くのことがあるのを見れば、ただ前例と習慣だけで納得してきたことを、あまり堅く信じてはいけないということ、でした。こうしたことは、現代の硬直した大組織の前例主義的な体質や風土など、産業界や官界に対する警告としても充分に通用することです。

400年ほど前の西欧近代主義の萌芽の時代にも、それが発展を遂げて壁が見えてきた現代にも、同じような警告が通用するようです。こうしたことは、壁に突き当たったら原点に帰って考えるべし、という教訓を改めて私たちに示していると見てよいのかもしれない。